



# レジナレス・ワールド 1

η L P η η L I G η T

式村比呂

*Shikimura Hiron*

アルファライト文庫 

主な登場人物

Responsible World

### シュネ

穏やかで知性に優れる白竜の娘。  
とある事情で一族とはぐれてしまう。  
真の姿は白く巨大な竜。

Responsible World

### ジルベル

強大な力を誇る銀魔狼。  
シュウの窮地を救い仲間になる。人化はお手の物。

Responsible World

### ????

ゲーム時代から時折その姿を見せていたダークエルフ。  
所属や目的などすべてが謎に包まれている。

Responsible World

### シュウ

本編の主人公。  
ゲーム世界で「黒竜殺し」の二つ名を得た最強剣士。  
クラスは「サムライ」。

Responsible World

### クリステル

ハイエルフの精霊使い。  
山賊に捕らわれていたところをシュウに助けられる。

Responsible World

### ユーガ

世界樹の種。  
世界の運命の鍵を握る。  
シュウが大好き。

Responsible World

### サラ

シュウの幼なじみで、共にVR-MMO世界に転生する。  
「舞姫」と呼ばれる「ホリウナイト聖騎士」。

1

「う……ん……」

はるか地平線が春の陽気にかすんでいる。そこにさわやかな風が渡っていく。

そよぐ風が美しい新緑の草を揺らし、シユウの頬をくすぐった。

気持ちよさとむずがゆさに目覚めると、隣から同じような女性の声が聞こえ、たのなかろ田野中修の意識は、一気に覚醒する。

寝ころんだまま横を見ると、そこにはよく見知った可愛い幼なじみの顔があった。

「あれ？ サラ？」

「ん……シユウ君？」

二人は仰向けの姿勢で顔だけを動かしてお互いの姿を確認すると、それぞれむくつと上半身を起こした。

サラの目が、シユウの顔からすつと下半身の方に流れる。その視線に応じてシユウも、

自分の下半身に。

「きゃっ—」

サラが思わず悲鳴を上げる。それはほんの小さな悲鳴だったが、シユウの頭を一瞬で混乱させるのに充分だった。

「なっ…！ えっ！ えっ？」

何一つ身に着けていない生まれのままの姿。目覚めの瞬間の、男性特有のあの状態になっっていないかったのは幸か不幸か？

シユウは飛び起き、いわゆる体育座りで股間を隠して、両手で出来るだけいろんな物が見えないようにガードしてみた。

そして、固まっているサラを見る。

顔から、胸、そして……。

青ざめていたシユウの顔がみるみる赤く染まっていく。その変化でサラが自分の姿に気付く。

「あ……っ、ごめっ」

「いやっ—」

とっさに左手で胸を隠そうとするサラ。だが、その手がかえってサラの大きな胸の形を

複雑に変えることになってしまい、むしろ男にとっては目に毒な事態だった。

『さっ！』

そこで突然、ほぼバニック状態と言っている二人の精神に冷や水を浴びせるほどに冷静な、だが威厳に満ちた男性の声が、二人の正面から発せられる。するとこの、不可解であり得ない状況に変化が生まれた。

『田野中修、サラ・ヨハンセン・富永。落ち着いたかね？』

二人の目の前に、青白く光る直径五センチくらいのガラス玉のようなものが浮かんでいる。そして、どうやらそれがしゃべっているらしい。ある程度年配の男性らしき声の響きだった。

『まず、二人に詫びねばならぬことがある』

存在するだけで威圧感を与えるその物体を前に、二人はしばし固まっていたが、詫びの言葉がきっかけになって、ようやく硬直から解き放たれる。

『——君たちは、今ここで目覚める直前、何をしていたか覚えているだろうか？』

「……ゲームをした、と思います」

とまどいながらシユウは答えた。目を合わすと、サラは眩くように言う。

「『東の森』に飛んでいるところでした」

『そうだ。二人とも、感覚的にはつい今しがたまで、自分の部屋でゲームをしていたと感じておるであろう?』

二人は小さくうなづく。

『君たちは、意識を失った瞬間に事故にあった——我々のミスで』

要を得ない説明だったが、総合すると、シユウとサラはなんらかの理由でこの世界に『存在』することになってしまったようだ。

その理由も意味も全くわからない。何を聞いてもこの目の前の玉は詫びるばかりで、事に至った過程を語ろうとしない。

ただ確かに、この世界は二人がプレイしていたゲーム『レジナレス・ワールド』に違いなかった。

「私たちの装備はどうなったんですか?」

サラが尋ねる。さすがに全く意味もわからないうえ、丸裸まるはだかにされてこの世界に放り出されれば、一晩で命はないだろう。

『ああ、すまない。君たちの荷物は、概念上がいねんじょうの——ステータスと言ったか? その中にすべて収められている』

二人は、それまでプレイでやっていたように念じて、ステータス画面を開いてみる——すると、確かにそこには、それがあった。

だが、出てきたのはアイテムガジェットのみで、パラメータや装備画面は見あたらない。

「これ、どうやって装備するんですか?」

シユウは尋ねてみた。

『取り出して、自分たちで着用してくれ』

「へえ、リアルですねえ」

シユウはアイテムを選択し、ゲームと同じ要領ようりょうで取り出してみる。

すると目の前に、選択した装備——サムライの羽織袴はおりばかまが現れた。

ふわりと浮かび上がり、手に取った瞬間、ずしりと重さ加わる。なかなか便利なものだ。

同じように草履ぞうり、刀と、アクセサリである敏捷性補正D E Xのリングを選び、早速着替えてみた。

何となく、見てはいけないような気がして目を反らそしていたが、やはり気になってサラの方をちらっと盗み見る。

ほっとしつつも、残念なところだが、サラはもう美しい白銀のプレートメイルにブーツ

を身に着け、二振りのレイピアを腰に佩<sup>は</sup>いていた。

シユウと視線が合うと、ちよつと照れたようににはかんだ。それを見て、また真つ赤になつてうつむくシユウ。

「ところで、ステータスがきちんと機能していないようですけど……」  
サラが光の玉に尋ねる。

『そうだ。残念ながらこの世界は、厳密にはゲームではない』  
光の玉はとんでもないことを言い出した。

『君たちはこの世界で、今まで過<sup>ご</sup>したように生きていけるだろう。だが——』  
そして、さらに衝撃的な事実を伝える。この世界は二人にとって現実そのもの、紛<sup>ま</sup>れもない「リアル」であると。

『君たちの死は、文字通り命の終<sup>しゆう</sup>焉<sup>えん</sup>だ。君たちが何かの命を奪えば、それらもまた死を迎<sup>むか</sup>えるであろう。これはゲームではなく、復活ポイントなどもない』

『そ、そんな！』  
『その事実を知っているのは、この世界で君たちのみだ。我々はこの世界を守り、維持<sup>いじ</sup>するが、手出しはしない』

『冗談じゃない！ あんたらのミスだろ。僕たちが何したってんだよ！』

『そうだ、我々のミスだ。そして、我々に出来るのはこれがすべてだ。後は君たちに任せよう』  
「お、おいつ！』

光の玉が徐々<sup>じゆじゆ</sup>に薄れていく。

『時間が来た。君たちの行く末に、幸多<sup>さいち</sup>からんことを……』

光の玉が唐突<sup>とうつ</sup>に消えた後、二人はしばし杳然<sup>ほうぜん</sup>と草原に座り込んでいた。全く意味がわからない。

ほんの数分前までプレイ中だった二人は、目の前が暗くなつたと感じた瞬間、すでに全裸<sup>ぜん</sup>でここに横たわっていた。少なくとも、そうとしか言いようがない。

シユウは再度ゲームシステムの確認をしてみるが、やはり、ステータスにはアイテムがジェットしか存在しない。

アイテムを確認していくと、なぜだか一番下に、金貨や銀貨が入っている。

これもあり得なかつた。所持金は普通、個人ステータスの上部に表示されているはずだ。さらにその個人ステータスそのものが存在しない。

「……システム」

環境設定やログアウトを管理するガジェットを呼び出そうとした。  
しかし、全く無反応だ。

「サラ、どう？」

シユウはサラにも同じことをやってみてみた。

だがやはり、お互い何をやっても、開くのはアイテムガジェットだけだった。  
後々、このアイテムガジェットとその中身だけでも、この世界では大変な恩恵をこうむることになると気付くのだが、まだ混乱の真っ只中ただなかにいる二人にとっては、それどころではなかった。

一通りのことを試し終えると、二人は再び草原に並んで腰掛け、呆然と空を眺めていた。



シユウとサラは、同じマンションに長年暮らす幼なじみだった。

急な来日で日本語さえ覚束おぼつかなかったサラ。しかし「中学はシユウと同じ学校に通いた  
い」と頑張り、高競争率を誇る有名私学に帰国子女枠で入学し、晴れて彼の同級生と  
なった。

それから六年。

二人は高校三年生になっていた。

「シユウ君」

サラが、カバンを肩に担いで歩くシユウを後ろから呼び止めた。

「……おう」

眠そうな目をちらっと後ろに向けて、シユウは気のない返事をする。

一流モデルとして名の売れている姉と違い、サラの身長はシユウより低いくらいだった。  
やはり姉同様、日本と北欧のハーフの血が織りなす繊細な美しさが人目を奪うが、発育  
した胸と腰に比べ、身長が伸び悩んでいた。

本人は相当悩んでいるようだったが、シユウに言わせると——本人には言ったことも  
ないが——「ちょうどいいプロポーション」ということになる。

サラの姉と歩く時、シユウは周囲の人たちから見て、自分が明らかにゲームで言うモブ  
キャラになっているのがわかる。

そんな意味でもサラと過ごすのは、彼女には失礼かと思うが等身大で、シユウにとって  
は心地よいのだった。

サラは髪の色もブロンドと言うよりは明るい茶色で、瞳も日本人に近い鶯色だ。

昔はサラから、よくそんな容姿の愚痴をこぼされたシユウだったが、この頃は聞かなくなった。

そんな二人が今ハマっているのは、『レジナレス・ワールド』というVR・MMOだ。VR・MMO——二十一世紀中頃に急速に発展したヴァーチャル・リアリティ技術を応用した体感型仮想現実装置を使って、オンラインでプレイできるロール・プレイング・ゲームの一種。

神経バラスを模倣することで、ある一定のレベルまで五感をだまし、プレイヤーによりリアルな娯楽を提供するそのゲームは、急速な普及によってコストが下がるとすぐに、かつてない規模の市場を形成していった。

レジナレス・ワールドではイベント活躍者の報酬として、二つ名が与えられるシステムになっている。サービス開始から一年ほどになるが、まだ二つ名を持っているプレイヤーは二十人ほどしかない。

その栄誉あるプレイヤーのうちの二人が、シユウとサラだった。

シユウの『黒童殺し』は、名前の通り、黒童討伐イベントで止めを刺したプレイヤーの称号だ。

シユウ個人の技量のみならず、討伐を成功させたチームの力が大きかった。

サラの称号『舞姫』は、魔族襲来イベントで迎撃最多勝利を獲得した結果で、こちらもサラをカバーしたチームの総合力が背景にある。

シユウの期末試験の成績がよかったことで、サラはシユウと同じ学部にはエスカレーター進学できそうだと盛り上がった。

「これであと四年は、シユウと付き合うチャンスがあるわね」

ある日それを聞きつけたクラスメイトが、一緒にトイレに来て言った。

サラは微笑んで目を伏せる。

「あんたらを見てるとなかなかくっ付かなくてイライラしちゃうけど、人それぞれだしねえ」

「イライラはひどいな……」

サラの表情が苦笑に変わる。

まだ慌てたくない。もっとじっくり。サラは思う。

十二歳で出会った頃のシユウは、どこか自分に対して、妹を護る兄のような立場にいたことをサラは感じていた。

でもこの数年で、自分はただ護られる妹のポジションから、同級生の異性へと確実に変



化してきたと思う。

今年の夏休みは、もうちょっとだけ近付きたい。サラは期待している。

「全く、こないだいい女が横にいるつてのに、シユウはなんで焦りもしないのかしらね」

——きつと、家族ぐるみの付き合いが長すぎたせいだ。

サラはいつもそう答えている。

シユウとサラの二人は、学校から帰るとすぐに入浴を済ませ、夕食を取ってからVRマシンの潜り込んだ。

夜七時。ログインを済ませると、すでにギルドメンバーは半分以上集まっていた。

「あれ？」

シユウと主要メンバーが挨拶から雑談を始めている横で、サラはフードをかぶった見慣れないダークエルフに目を留めた。

「うちにあんな人、いたっけ？」

横にいるシユウに話しかけ、視線を戻すと、すでにそのダークエルフの姿はなかった。

「誰？」

「……ううん、気のせいみたい」

サラが首を傾げていると、他のメンバーが話しかけてくる。

「今日はお前らどうすんの？」

「久々だから、腕慣らしに森の方でちよつと狩ってきますよ」

「そうか。俺らは新クエの情報収集に行ってくる。二人で平気か？」

「はい」

「じゃ、また後でな」

彼らのパーティが転移するのと同時に、シユウたち二人も本拠地である『始まりの街』レオナレルから、テレポルトポイントを使って東部にある狩り場へと移動する。

ギルドメンバーのテレポルトが完了したと思った瞬間、強い衝撃が彼らを襲う。

「な……なんだ？」

システムシャットダウン。

ギルドのメンバーたちはそれぞれの自宅で、VRマシンからイジェクトをされていた。数分遅れて、全プレイヤーの緊急イジェクトが行われた。

オンラインだった全プレイヤーの一斉アクセスによって、公式ページは一時的にダウン。そのため、プレイヤーたちが、今起こったことを把握するのにかかりの時間を要した。

ギルドメンバーたちは一斉に共有のチャットシステムにアクセスしたが、ついに最後まで

で、インしていたはずのシユウとサラは現れなかった。



風がひどく心地いい。

ふと見上げると、薄い白い雲が、奇妙なほど早く流れていく。

「こんな状況じゃなかったら、本当に最高なだけだな」

シユウはそう呟きつつ、ちらっとサラを見る。

サラは、ついに耐えかねて泣き始めていた。

「うつ……うつ、ふっ」

訳のわからない不安。だがこの感覚は——少なくとも、五感に伝わってくるこの生々しい感触は、二人がここに放り出された事実を何より残酷に肯定している。

ふとシユウは、先ほどの光の玉のように、サラまですっと消えてしまうような恐怖感と孤独感に襲われて、泣いているサラの頭を抱き寄せた。

ほんの一瞬、驚いたようにシユウの顔を見上げたサラは、今度は自分の意志でもう一度シユウの胸に顔を埋め、声を殺し、肩をふるわせて泣いた。

「——取り乱してごめん」

サラの目は腫れ上がってひどいものだったが、しばらくするとだいぶ落ち着いたのから、えへっとした表情を作ると、シユウの体から身を離した。

「サラ、ちょっと歩いてみようか？」

「うん。状況もわからないし、出来たら街を探したいよね」

お互い同じ懸念を抱いていたようで、ほっとする。

もしここが本当にレジナレスの世界だとしたら、二人つきりでの野宿はどうしても避けないところだ。

立ち上がったシユウは、サラに手を伸ばす。

自然な振る舞いでその手を取って、サラはまたはにかみながら、「シユウ君、気を遣ってくれてありがとう」と礼を言った。

とりあえず二人はあたりを見渡す。

「シユウ君。ここ、見覚えある？」

「ううん、来たことはない気がする」

なだらかな斜面になっている草原、太陽の位置から考えると、斜面は北から南に向かって

て下っていて、反対側には森があった。

さすがに現状を把握していない段階で森に入るのは避けたいので、とりあえず下ってみようということになり、二人は歩き出す。

今見えている地平線は、おそらく五キロメートルほど先だろう。あそこまで行くのに一時間くらいかかることになるか。シユウは大まかに計算した。

どうも移動距離が長くなりそうだ。ならば、移動力補正のある靴を使った方がいいかもしれない。

移動力が増加する靴はゲームでも人気のアイテムで、シユウもちゃんとアイテムガジエツトにストックしているのだ。

早速履き替えて歩き出す。最初は単に歩きやすくなっただけかと思っただけだ――。

「サラ、『ウイングブーツ』持ってる?」

「あるよ?」

「ちょっと履き替えてみて」

サラにも履いてもらい、彼女の様子を窺う。

「わっ、これ効果あるね……」

そうなのだ。どうやら、魔法効果の装備品は、はつきりそれと体感できるほど効果があ

ることがわかった。

「かなり楽になったよね」

「そうね。でもそうしたら、ネックレスとかピアスとかピアリングも、ちゃんと装備した方がよさそう」

サラはそう漏らした後、ふと憂鬱そうに顔を曇らせる。

そう遠くない未来に遭遇するだろう魔物との戦いを思い、気が重くなっているのかもしれない。

「うん。ちよつと装備を見直そう」

二人は立ち止まり、アイテムを確認することにした。

二人の所持品の中で現時点で最適と思われるのは、ステータス異常回避の『魔防のアンクレット』、ゲーム内では防御力+10だった『護りのリング』。魔法抵抗のネックレスなども効果的だろうと思えた。

シユウにはないがサラはピアス穴があるので、耳に魔力増強のピアスを着けた。腕には敏捷性が上がる腕輪をはめる。

また、武器防具の類も見直す。

シユウはクラスが『サムライ』だったためベスト装備だ。

サラは戦闘時、主に『聖騎士』の重装備である両手剣を使用するので、レイピアをしま

い、現時点で彼女が持つ最強の剣、ドラゴンズレイヤーを左腰に佩く。

さらに炎属性のナイフを、右の尻あたりに邪魔にならないように下げた。ちなみに、シユウの装備する日本刀はレアアイテムではないが、炎属性+3が付与されている。脇差も風属性+3という贅沢なものだ。

装備を調べて、二人は改めて南を目指した。

二時間ほど歩いただろうか、行く手に川が見えてきた。舗装こそされていないが道も発見できた。

特に根拠はないが、シユウが「川上より川下の方が街の規模も大きそう」と言うと、サラも「なるほど」と妙に納得してうなずく。

二人は川沿いの道を東へ、川下へ進むことにした。

疲労はさほどでもないが、さすがに不飲不食で半日近く歩いているので、二人は次第に空腹を感じてくる。

「ポーションでも飲んでみようか？」

「飲む！」

予想以上にひどい味がした回復薬を飲み干すと、二人してなんとも微妙な表情で顔を見

合わせ、しばらく笑った。

再び荒れた道連れ立って歩いていると、遠くにぼんやり、人工物らしき姿が見え始めた。

人の暮らしの気配を感じるというのは、どうしてこうも安心感があるのだろうか。

だが旅というのは、ほっとした頃、なぜだか悪いことが起こりやすい。

村のほど近く、少し先に馬車が見えた時、その周囲に只事ではない気配を感じて、二人は駆け出した。

二人の男が馬車の左右に分かれて、黒い何かと戦っている。

御者らしき男は地面に倒れ、動かない。

二人が幌をかけられた商人用の馬車から離れようとしないうことは、おそらく誰かが乗っているのだろう。

「——ゴブリン！」

一匹一匹の戦闘力はさほどでもないが、守る二人の男に対し、ゴブリンは四十匹ほどで攻めては引き、また攻める。

数で押す波状攻撃に男たちは翻弄され、ひどく疲労しているように見えた。

装備からすると傭兵か、冒険者か。

一人一人はさほどなまくらには見えないが、とにかく数が多いうえ、御者をやられて逃げるに逃げられないらしい。

シユウとサラはそれぞれの得物を抜いて斬りかかった。

ウィングブーツの効果か、通常では考えられないほどあつという間に敵前にたどり着く。「ハッ！」

およそ普段の穏やかな物腰とはかけ離れた裂帛の気合いを放ちながら、サラは両手大型のドラゴンスレイヤーを横薙ぎに一閃する。

鈍く黒い色に光るそれは、一振りですべて、五匹のゴブリンを両断し、激しい血しぶきを周囲に散らしていく。

シユウも、素早い身のこなしから抜き身の日本刀を縦横に振り抜き、スキル《ファスト・コンビネーション》を発動。あつという間に七匹のゴブリンを斬り伏せる。

思わぬ援軍に一瞬あつけにとられた警護の男たちも、すぐに状況を理解すると、ゴブリンに打って出た。

ほんの一瞬で攻守が逆転したのを見て、あつけないほど潔くゴブリンたちは逃走を始めた。

生まれて初めて体験する血と臓物のひどい悪臭の中、シユウとサラは、こみ上げる吐き



気をこらえ真つ青な顔をしながらも、襲われていた男たちの元へ戻った。

黒い出で立ちのシユウはまだしも、白銀のプレートアーマーに白い肌をしたサラは、返り血を浴びてすさまじい外見になっている。

その様子には、助けられた男たちでさえ言葉を失い、ややもすると怯えているようだった。

「大丈夫ですか？」

シユウが声をかけると、呪いが解かれたかのように男たちは生気を取り戻した。

「……あ、ああ。助かった、感謝する」

「サラ、その人見てやって」

「あ、うん……」

道に伏せたまま動かない御者を指してシユウが言うと、まだ右手に血まみれの剣を握ったまま呆然としていたサラは、のろのろと倒れた男に顔を向けた。

これはダメだな。シユウはサラを見て直感した。

「その人の手当てお願いできますか？」

シユウは警護の男たちに声をかけてから、荷馬車の中を覗き込んだ。

そこには、恰幅のよい商人風の男が一人、がたがたと震えながらうずくまっていた。

「すみません」

声をかけるとびくっと飛び起き、シユウを見て、また固まった。

「何か拭くものをお借りできますか？」

そう聞くと、やっと我に返ったのか、柔らかなタオル大の布を何枚かくれた。

シユウはそれで顔を拭いたが、なかなか血糊が取れないので、やむを得ずサラの手を引きながら河原に下りていく。

川で手と顔を洗って、やっと人心地ついたシユウは、そのまま布を水に浸し、サラを岩に腰掛けさせ、顔と手を拭ってあげた。

「サラ？ 大丈夫？」

「え？ うん」

サラはまだ心ここにあらずといった状態だった。

シユウはサラの手から剣をはず取ると、こびり付いた血を落とし、サラの腰の鞆に収めた。

そして、サラの顔を胸に抱きしめて、そっと耳元でささやく。

「サラ、終わったよ。もう大丈夫」

サラは何も答えず、ただシユウの腰を力一杯抱きしめた。

「なあ、あの二人何者だろう？」

助けられた男たちのうち、やや若い男が、大柄な年配者に小声で話しかけた。

「わからん」

大柄な男は、シユウたちを食い入るように見つめながらも、興味のなさそうな声色で素っ気なく答えた。

「装備も腕も半端じゃない。だのにはあは、初陣の後の新米みたいな……」

「わからん」

今度は明らかに不快感を漂わせながら、大柄な男は若者に振り返り言った。

「なんにせよ、俺らにとっちゃあ、命の恩人だ」

その様子は街からも見えていたのだろう。しばらくすると、街の守備隊らしき男たちが二十人ほど、連れ立ってこちらに駆けてきた。

彼らに誘われ、シユウとサラもゆっくり街の方に歩みを進める。

ひどい傷だが御者の男もなんとか命を取り留めたようで、今は馬車に乗せられ、介抱されながら街に向かっている。

「お前さんたち、何者なんだ？」

守備隊のリーダーらしき貫禄のある男が、シユウに尋ねた。

「あの腕前はすさまじい。なんにせよ助かった、礼を言う」

「すみませんが、今とはとにかく体を綺麗にして休みたいんです。今日は朝から何も食べてませんし、一日歩き通しで疲れてるんです」

シユウはサラの肩を抱きながら、リーダー風の男にそう返す。

「任せてくれ。宿と食事、風呂の手配は俺たちです。俺はガイラス。お前らの名前を聞いていいか？」

「僕はシユウ。こっちは、サラです」

「格好からすると冒険者か？」

「訳あって旅をしています。まあ特に冒険者ではないんですが」

「そうか。とにかく歓迎する。旅と言ったが、やはり王都を目指しているのか？」

「ええ、まあそうですね。急ぐ旅でもないんですが」

勝手がわからないので、シユウものりくらしと歯切れが悪い。

「ならゆっくりしていきいってくれ。ようこそ、レリウの街へ——」

レリウは、小さいながらもしっかりとした外郭を持つ都市だった。

人口はさほど多くはなさそうなものの、暮らしぶりからそここの地方があるようにも

見える。

シユウもサラもゲーム時代に貯めた分で、この世界においては「財産」というにふさわしい金銀を持っている。金の面での不安はさほどないだろう。反対に、それを狙われる恐れがあった。

まあとにかく、このこの、この世界の様子をしばらく学ばねばならない。

シユウは、まだ呆然とすぐんだままのサラの肩を抱く手に力をこめ、ガイラスの招きに応じ、街の中心近くにある一軒の宿屋へと向かっていった。

ガイラスの顔なじみらしい宿の女将が、シユウとサラの血まみれの姿に一瞬顔を強張らせながらも、すぐに事情を悟つたらしく、お湯を用意しに走り回った。

シユウは女将に、「誰かサラの入浴を手伝ってあげて欲しい」と頼んだ。

「任せておきな。こう見えてもあたしは若い頃、エルナー様のお屋敷にご奉公に上がってんだ」

彼女は大きな胸を叩いて見せた。

サラの容姿と格好から、女将はサラが高貴な身分だとも思ったのだろうか。まあ問題になる誤解でもないので放っておく。

金はいくらかとシユウが聞くと、「まあ今日のところは奢らせてくれ」とガイラスが大

きな口を開けて笑った。

人間、現金なもので、風呂呂に入り身なりを整え食事をする、胸にわだかまった嫌悪感より疲労と眠気が勝っていく。

入浴中のサラの様子を女将に聞き、また、食事中の表情も窺っていたシユウは、彼女がかなり参っているのをひしひしと感じた。

「じゃあサラ、お休み。なんかあったら隣にいるから」

シユウはそう声をかけると、自室に戻った。

サラの精神がダメージを受けるのはわかる。

正直、シユウにとっても先刻のあれは応えた。

手に伝わる肉を切る感覚。噴き出す血。生暖かく不快なそれが自分の顔に、服に、手にこびりつく。さらに、あの血と臓物の臭い。

魔獣ゴブリンとはいえ、生き物の死にも狂いの叫びと、断末魔のうめきは強烈だった。

寝るしかない。シユウは布団の中で苦笑する。

日が落ちてからもどこかしら喧噪の絶えなかったレリウの街が、ようやく寝静まった頃。シユウはふと違和感を覚えて目を開けた。

自分の布団の右側に誰かがいるのに気付いて顔を向ける。そこには子供のよう寝顔を



したサラがいた。

どうしたんだろう。怖くて一人で寝られなかったのだろうか？

ただ、シユウも今日はさすがに限界だった。

空腹と疲労、そして緊張。

それらから解放された肉体は思考さえ許さず、シユウの意識を睡眠へと引きずり込む。街までずつとそうしてきたように、せめてサラの肩を抱いてあげよう。そう思ったところで、再びシユウは深い眠りへと戻っていった。

「おや、夕べはお楽しみでしたかね？」

「……それどころじゃありませんでしたよ」

にやりと笑う女将に声をかけられ、シユウはゆらゆらと起き上がる。

布団では、サラがまだ寝息を立てている。

「ガイラスとグレイズが下に来てるよ。あなたに話があるようだが、後にさせるかい？」

「グレイズ？」

「あんたらが昨日助けた商人だよ」

「ああ……着替えるから待ってもらっていいですか？」

「あいよ」

女将は水を張った洗い桶おけと新しいタオルを置いて出て行った。

シユウは、昨日洗濯を頼んでまだ返ってこない羽織袴の代わりに別の軽装で身なりを整え、洗い桶で顔をすすいで階下に下りていった。

「おはよう、シユウ」

ガイラスが一階の食堂風になっている広間のテーブルに腰掛けていた。

「おはようございます、ガイラスさん」

「おはようございます。昨日は危ないところをお助けいただき、誠にありがとうございます」

例の恰幅のいい商人——女将がグレイズと呼んでいた男が、おずおずとシユウに声をかけた。

「いえ。たまたまですし、おかげで昨夜は私たちも助かりました」

半日以上無人の草原をふらつき、食うものもなかった一日の終わりにしては、非常に心地よい風呂と食事と寝床ねどこだった。生き返った気がする。

招かれるまま座り、シユウは女将の心づくしの朝食を食べながら、二人の用件を聞くことにした。

「実はシユウたちに、王都までグレイズの護衛をしてもらいたいんだ」  
 ガイラスはそう切り出した。

早い話が、昨日の立ち回りを見て用心棒として雇いたい、ということらしい。しかしシユウは、サラの様子が気になってあまり気乗りがしなかった。

王都に行こうとは考えているが、別に急ぐ旅でもないし、それよりサラがゆつくり心を落ち着かせてくれた方がよほどありがたい。

いち早くその思いを読み取ったグレイズが、困ったような目線でガイラスを促した。

「ここんところあまり魔物に出くわすこともなかったんだが、昨日のあの騒ぎでさ」

こいつがひどく不安がってるんだと、ガイラスは言う。

「それに、あんたらもし王都を目指すんだつたら、一石二鳥じゃないかと思つてな」  
 まあ確かに、それはその通りだ。

「ただ、僕たちも誰かと約束があるわけではありませんし、サラの調子が戻るまで、ここで休んでいたいんですよ」

すると今まで黙り込んでいたグレイズが、こちらを窺いながら話し出した。

「で、でしたら、シユウさんだけでもいかがでしょうか？」

グレイズによると、普段であれば、街の若者が数人もいれば護衛として充分らしい。

だが昨日、このあたりでは数十年ぶりにゴブリンの集団が奇襲してきたため、グレイズも、護衛の面子も肝を潰しているのだという。

だが、人口もそれなりにあり人の往来も活発なレリウにとって、物流の停滞は非常にづらい。

そこで、シユウやサラといった凄腕の冒険者が滞在している今、ガイラスたちにもう一台馬車を仕切ってもらい、二台で王都まで大量に必需品を買い出しに行きたい——というのがグレイズの考えらしい。

「出発の予定はいつですか？」

「明日、あるいは出来るだけ早い方がいいのです」

少し相談します。シユウはそう告げると、それっきり黙って食事を続けた。

さすがにお腹が空いたのか、サラは昼前にやつと起き出してきた。

どうやら確信犯だったらしく、シユウの布団に潜り込んだことには全くノータッチだった。だったら明日から同室でもいいかな、とシユウは思う。

とりあえず一階のフロアのテーブルで、サラの食事が終わった後、先ほどのガイラスたちの頼み事を相談してみた。

「また、昨日みたいなことになるのかな」

サラの口調は静かだったものの、明らかに後ろ向きだった。

「じゃあ、僕一人で行ってみようか？ どちらにせよ一度王都ってところの様子は見たいし。サラはその間、ここでゆっくり休んでいたらどうかな」

「えっ……」

「片道十日くらいかかるかもしれないみたいなお話だった。まあ二十日くらいしたら帰ってこれれると思うけど、いいかな？」

「……」

サラはうつむき、何も話さなくなってしまった。

「とりあえず、気分転換に買い物に行かない？」

食事を終えたサラにシユウが提案してみる。

「買い物？」

サラがあまり前向きでないような口調で返すと、シユウは小声でサラに耳打ちした。

「下着、とか」

サラは一瞬身を硬くした後、真っ赤になりながらうなずいた。

レリウは活気のある街だった。

縫製の技術はあまり発達していないのか、服や肌着の類はデザインも機能性もよくなかったが、二人ともそうした手持ちが全くなかったので、ここで十着以上のストックを買いそろえた。

そもそもVR・MMOのゲーム世界では、下着の必要性がない。そのため、アイテムとして一切存在していなかった。もちろん女性用も同じだ。

買い込んだパンツはゴムが使われていないために、使い勝手というか履き心地がひどく悪い。ごわごわした肌触りなのが特に残念だった。

だがまあ、ないよりはマシなのである。

支払いの段になって、ちよつとしたトラブルがあった。

「おいおい、街場の店で金貨なんぞ出されても困るよ」

相場がわからないので、とりあえず金貨を出して払おうとした二人に、店主が困惑顔で言った。日用品の買い物はせいぜい銀貨で事足り、通常は銅貨が主要な通貨になるらしい。

ゲーム中では通貨を意識せず買い物が出来たため、今ひとつ二人は相場観がない。

「あ、すいません」

シユウは慌てて銀貨を取り出し、支払いを済ませたのだった。

その後、武器屋や防具屋を見て回り、まだ少し早い二人は宿に引き返した。武器や防具はめほしいものがなかった。

そもそも二人は、この世界では非常識に高性能な品々を大量にストックしているため、改めて買いたいと思えるほどの品がないのだ。

シユウたちは宿屋に着くと、女将に「今日から相部屋にしたい」と相談する。ベッドはツインがあったので、そうしてもらった。

料金を聞くと、ガイラスが払うと言って帰ったとのことで、女将はそれ以上答えようとしなかった。

あまり世話になるのは居心地が悪いので、シユウとしては自腹で泊まりたかったのだが、やむを得ない。

二人がそれぞれの部屋から移動をしている時、女将がサラを呼び止めた。

「ねえあなた、凄腕なんだってねえ」

「……なんででしょうか？」

「一瞬でゴブリンを十匹くらい、ばっさばっさ斬っちゃうんだってね」

「……」

「うらやましいねえ」

サラはカチンと来たのだろう。女将を睨むと、小声で吐き捨てるように言った。

「何がうらやましいんですか」

「うらやましいさ。あなたはその腕であの坊やを守るんだからね」

今までの、サラをからかうような口調から一転し、女将はしみじみと言った。

「あなたちょっと下において。お茶でも飲んで話そう」

「あれ、どこに行くんですか？」

シユウは、サラを連れて行こうとする女将に問いかける。

「女同士の話だよ。あなたは部屋でも片付けておきな」

サラと女将は、一階のカウンター奥にある厨房のテーブルに腰掛けた。サラにお茶を勧めると、自分も軽くお茶を啜って、女将は話し始めた。

「もう二十年も前になるかね。あたしの旦那も、よく頼まれちゃ護衛の仕事をしたのさ。だけどある日、あんたらと同じように、ゴブリンの大群に出くわしちゃまってさ」

街の人間が大挙して搜索に出たものの、馬と荷は奪われ、四人分の死体が散乱していた。死体はひどい有り様だったらしい。

「あの人なんか、頭と足がなくなってたし、いくら探しても見つからなかったねえ。内臓

もすつかりなくなつて、ぼつかり穴が開いてるようだったよ。食われちまったか、どうしたもんか」

そこで女将は、サラをじっと見つめた。

「あんたは、そういう奴らと戦つてるんだ。あの日あんたらがいなければ、護衛の連中は奴らに殺されてただろうさ」

「……」

サラはとっさに返す言葉が浮かばない。

「あたしにあなたの腕があつたなら、亭主を一人で行かせたりしなかつたらうね」  
 そう言うと、女将は自分の茶碗を流し場ですすぎ、勝手口から表に出て行つた。

夕食の時間になると、再びガイラスとグレイズが宿屋を訪ねてきた。

シユウとサラを交え四人で夕食を取りながら、明日以降の予定を話したいようだ。

「僕も王都へ行ってみたいですし、とりあえず一緒にしようと思います」

シユウはサラを窺つた。

「私も、行きます」

何があつたのか、サラはずいぶんあっさりと言つた。

シユウは不思議に思いながらも、心の内ではサラの変化を喜んでいた。やはり二十日以上也離れるのは心配だし、なんと言つても淋しい。

こんな世界に突然放り出された二人だから、どこかしら共鳴している部分があるとシユウは感じている。

「だからこそ出来る限り常に一緒に行動したいと思う。だが、まだサラにはつきりそう頼むことが出来ない思春期特有の歯がゆさを、シユウは抱えていた。

ガイラスとグレイズはとても喜んで帰つて行つた。

明日からは、二人にとって新しい冒険が待っている。シユウは胸の高鳴りを感じながら眠りに就いた。

## 2

翌朝目覚めると、サラはまたシユウのベッドに潜り込んでいた。

洗い桶に水を張って持ってきた女将に「夕べはお楽しみでしたかね？」と聞かれて、シユウは「はいはい……」と答える。